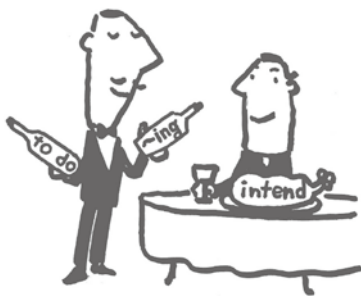


第5章 語源で変わる!! — 文法から語法へ

ある学生街の路地裏に、筆者が通っているワインバーがあります。元フレンチのシェフだったマスターは、ワインのつまみにチーズを食べることにあまりいい顔をしません。「チーズと一緒にワインを飲むと、そのワイン本来の味がわからなくなるので、まず一杯目は、ワインを味わって飲み」と言うのです。確かに、チーズ1つでワインの味や印象は大きく変わります。

料理とお酒の組み合わせは、とても重要です。塩辛、からすみ、さきイカみたいな日本の肴に、ワインを組み合わせたら、たいていはどちらも台無しになってしまいます。

言葉にも「組み合わせ」があります。どのようなつながりで、どの言葉を使えばよいのか。intendはto do (to不定詞)と組み合わせるのが自然なのか、～ing (動名詞)と組み合わせるのが自然なのか。こういった個々の単語の使い方は「語法」と呼ばれています。



(1) 語法と語源

「語法」という言葉をよく耳にします。「文法」と並んで「語法」が大切だ、と言われます。この2つの違いは、文字通り、

「文法」は「文のルール」 vs. 「語法」は「語のルール」

となります。**文法は英語を全体として見渡したルール**です。たとえば、文法書には次のように書いてあります。

「動詞の中には、目的語にto doを取るもの、～ingをとるもの、また両方を取るものがあり、to doを目的語に取るものにはintend / decide / planなどがある」

対する**語法は、「1つ1つの単語の使い方」**です。同じことに言及する場合でも、個々の単語に焦点を当てます。

「intendは目的語に～ingではなくto doをとる」

というのは語法的なアプローチです。文法も語法も、どちらもintendの後ろには、～ingではなくto doをつなげると言っています。しかし同じことを言うのでも、英語全体、不定詞の用法全体の中にintendを位置付けるのが文法です。「語法」では、あくまでintendを中心に使い方を見ていきます。

語法的なアプローチは、言葉を「使う」という点からはとてもよいものです。

intendを使おう、と思ってintendを頭に思い浮かべているときには、「同じ使い方をする単語は他にどんなものがあるか」よりも、「intendの使い方」が思い浮かぶほうが実践的だからです。